

女子短大生の被服行動と衣服管理

Behavior and Repair of the Women College Students for Clothing

鷺 見 裕 子

Hiroko Sumi

(要約)

衣生活学習において衣服管理と購入・着用を関連づけて学習し、衣生活全体への関心を高めるための授業展開を検討するための資料を得ることを目的とし、女子短大生の「選択・購入」、「使用・着用」という被服行動の傾向を「被服行動尺度」をもちいて調査を行った。結果として、流行性を重視する傾向が強いほど、経済性にはマイナスの影響がある。機能性と適切性には相互に高い関連を示した。衣服管理のための取り扱い絵表示の理解や衣服購入時での衣服管理考慮の有無が機能性や適切性の行動様式に影響を与えていた。

(キーワード)

衣生活学習、被服行動、衣服管理

はじめに

現代の生活は家庭内だけで処理できることが少なくなり、家庭生活、つまり衣食住、保育・介護などは公私のサービスなしでは成り立たず、家庭生活は社会化・外部化が進展している。とくに被服は、戦後の合成繊維や縫製機器などの科学技術の進歩や寸法の規格化、既製服産業の躍進により、私たちが日常着る衣服はそのほとんどが購入した既製服であり、衣服を家庭内で製作するのは極少数派となっている。また、大量生産・大量消費により補修・修繕すら行われない家庭も多くなった。

一方、家庭科の中・高等学校の衣生活学習においても、社会の変化や男女共修の実施により、かつては技能習得の割合が多かった被服学習は見直され、結果として時間数の減少や選択化によりその学習内容が縮小されている現状がある。

そのような生活現状と教育環境にある学生に対して、介護福祉士として、高齢者・障害者の衣生活を総合的に理解し支援するための能力を養成すべき衣生活学習はその内容や展開の精査が必要となる。

筆者は前報¹で、介護福祉士養成教育における衣服管理の授業検討のために大学生の衣服管理の意識と実態を調査し、取り扱い絵表示への関心の育成が衣服管理の意識形成や実践への有効な手段となることを導き出した。さらに、課題として衣生活全体の関心・理解を深めるためには、衣服管理と着用や購入とのつながりを気づかせることの重要性も考慮しなければならないことを報告した。

そこで本報では、介護福祉士養成教育の衣生活分野での衣服管理を中心とした授業内容を構築するために、「選択・購入」、「使用・着用（消費）」の2つの側面に着目した被服行動尺度調査により、学生の被服行動の傾向を知ることを目的として行った。

方 法

1. 調査対象及び調査方法

本学子ども学科に在籍する1年女子学生（160名、平均年齢 18.3 ± 0.48 歳）に2007年6月、2年女子学生（112名、平均年齢 19.6 ± 0.55 歳）に2007年10月に調査を行った。その中の有効回答者（1年生157名、2年生109名、計266名）について分析対象とした。調査は授業時間を利用して、自記式で実施した。

2. 調査項目及び分析方法

質問紙には被服行動全般についての尺度を測定できる、永野（1994）²の「被服行動尺度」を用いた。これは4つの被服行動次元、衣服の流行に関する「流行性」、衣服の機能性、快適性に関する「機能性」、衣服の社会的な適切さに関する「適切性」、衣服の経済性に関する「経済性」から構成され、個人が示す恒常的な被服行動の傾向を測定することができるものである。4つの尺度に各5項目の計20項目に対して日常の衣服に関する行動傾向について「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」の7段階の評定法により評定させた。調査に際しては、尺度名を削除し、ランダムに並べ替えて質問紙を作成した。なお、1年生に関しては衣服管理・購入に関する質問紙調査も行った。質問項目は「洗濯等の衣服の管理についての学習をしたか」（以下、学習経験）、「洗濯を自分でするか」（管理実践）、「取り扱い絵表示の内容を理解しているか」（表示理解）、「服の購入時に着用後の管理を考慮するか」（購入管理考慮）の4項目について2～3選択肢で、さらに、「流行・機能性・社会的適切さ・経済性・着用後の管理」の5項目で服の購入時に重視する順位を回答させた。

被服行動尺度調査の集計では、項目ごとに「全くあてはまらない」を1点、「非常によくあてはまる」を7点として、5つの項目の得点を単純合計し尺度の得点とした。各尺度の得点範囲は5～35点となる。さらに4尺度間の関連、および衣服管理との関連を分析した。なお、分析には統計ソフトSPSS11.5を用いた。

結果および考察

1. 被服行動尺度の結果

各尺度と項目の得点平均値と標準偏差の結果と学年の比較を表1に示した。20項目中で、5点以上の肯定的な回答結果は、「丈夫で長持ちする服がよい」の衣服の品質に関わる機能性と、「不謹慎だと思われる服装はしない」、「その場に合った服というものは必要であると思う」、「その時の仕事の内容にふさわしい服装をするようにしている」の着用に対する適切さや外見に関わる3項目が該当する点であった。3点以下の否定的な回答結果は経済性の「百貨店やブティックよりはスーパーマーケットで服を買うことが多い」の購入で多くないとするものであった。特に衣服の身だしなみの適切さについての関心の高さがうかがえた。また、短期大学入学2ヶ月目の1年生と1年6ヶ月経た2年生での学年比較において、4つの尺度では有意差はみられなかったが、「その場に合った服装は必要」、「仕事の内容にふさわしい服装をする」の適切性尺度の2項目で2年生が有意に高い値を示した。小林³によると若者は性別や年齢、しきたりにこだわらず、自由に衣服を着こなす傾向が強く、高齢者は服装規範を重視する傾向にあり、服装規範の重視度は年齢による影響が大きい。また規範の受容は経験による着装的意識と行動の基準が大きな要因となることから、今回の着用行動の適切さへの重視の差は、教育実習や保

女子短大生の被服行動と衣服管理

育園・施設実習の経験を含む保育者養成教育によるところも大きいと考えられる。

表 1. 被服行動尺度と学年による比較

被服行動尺度・項目 < n >	全体 < 266 >	平均得点 (標準偏差)		検定 ¹⁾
		1年生 < 157 >	2年生 < 109 >	
流行性尺度 (5項目)	20.2(5.68)	19.9(5.28)	20.6(6.22)	n. s.
・最新ファッションを知るために多くの店をまわる	4.3(1.55)	4.2(1.38)	4.5(1.75)	n. s.
・最新ファッションを着るよういつも心がける	3.8(1.36)	3.7(1.30)	3.8(1.36)	n. s.
・今はやっているファッションについてよく知っている	3.9(1.29)	3.8(1.28)	3.9(1.30)	n. s.
・ファッション雑誌をよく読む	4.8(1.72)	4.7(1.66)	4.8(1.82)	n. s.
・人と区別する個性的な流行の服を着る	3.5(1.30)	3.5(1.22)	3.5(1.41)	n. s.
機能性尺度 (5項目)	20.1(4.29)	20.1(4.26)	20.2(4.37)	n. s.
・デザインより着用時の動きやすさ重視	3.7(1.25)	3.8(1.28)	3.7(1.20)	n. s.
・保温性や通気性の良い服を選ぶ	3.7(1.32)	3.7(1.30)	3.8(1.36)	n. s.
・華美より機能性を重視する	3.8(1.00)	3.8(1.15)	3.8(1.26)	n. s.
・吸湿性の良い生地の服を選ぶ	3.8(1.20)	3.8(0.99)	3.9(1.00)	n. s.
・丈夫で長持ちする服がよい	5.1(1.22)	5.1(1.21)	5.1(1.24)	n. s.
適切性尺度 (5項目)	25.2(4.00)	24.9(4.21)	25.6(3.66)	n. s.
・不謹慎だと思われる服装はしない	5.2(1.40)	5.1(1.40)	5.3(1.39)	n. s.
・その場に合った服装は必要	6.1(0.98)	6.0(1.01)	6.2(0.91)	*
・仕事の内容にふさわしい服装をする	5.4(1.06)	5.2(1.09)	5.7(0.97)	**
・人が場違いな服装をしているのを見るのは耐え難い	4.6(1.43)	4.7(1.46)	4.6(1.41)	n. s.
・着用する服が社会的にふさわしいものか考える	3.8(1.57)	3.9(1.34)	3.7(1.29)	n. s.
経済性尺度 (5項目)	17.7(4.08)	17.5(4.38)	18.1(3.58)	n. s.
・安ければ気に入らなくても買う	3.3(1.57)	3.1(1.60)	3.5(1.51)	n. s.
・百貨店やブティックよりスーパーで服を買う	2.3(1.50)	2.2(1.40)	2.4(1.62)	n. s.
・多少値段が高くても品質のよい衣服を選ぶ	4.1(1.33)	4.0(1.41)	4.2(1.19)	n. s.
・高価な服は必要ない	4.2(1.30)	4.1(1.33)	4.2(1.26)	n. s.
・どんなに気に入っても高ければ買わない	3.9(1.57)	3.9(1.61)	3.8(1.50)	n. s.

¹⁾ t検定 * P<0.05、** P<0.01、*** P<0.001

各尺度の得点合計平均値と標準偏差(()内)は永野の女子大学生(n=431)の調査結果(1994年)²⁾では、流行性20.7(5.31)、機能性23.8(3.98)、適切性26.7(4.16)、経済性14.5(4.09)とあり、今回の調査はそれより機能性が3.7点低く、経済性では3.2点高くなったが、大きく異なる結果ではなかった。

表 2. 被服行動尺度の平均値・標準偏差と相関関係

	平均値	標準偏差	α	機能性尺度	適切性尺度	経済性尺度
流行性尺度	20.2	5.68	0.843	0.004	0.125	-0.255**
機能性尺度	20.1	4.29	0.761		0.363**	0.224**
適切性尺度	25.2	4.00	0.638			0.059
経済性尺度	17.7	4.08	0.653			

注) 検定 * P<0.05、** P<0.01、*** P<0.001 n=266

各尺度の相関関係をみた結果を表2に示した。流行性と経済性には負の相関が認められ、機能性と適切性、および経済性に正の相関が認められた。適切性と経済性、流行性と機能性、適切性には相関はなかった。各尺度の特徴をみるため、平均得点の上位25%を高群、下位25%を低群として2群間の質問項目の結果を比較した結果を表3～6に示した。

流行性尺度では、機能性、適切性では有意な差は認められず、経済性尺度の「百貨店やブティックよりスーパーで服を買う(5%水準)」「高価な服は必要ない(0.1%水準)」「どんなに気に入っても高ければ買わない(5%水準)」の項目で高群のほうが低群より有意に低い値を示した。

機能性尺度の高い群は、適切性の5項目すべてで有意(0.1%水準)に高い得点を示した。また、経済性の「高価な服は必要ない(1%水準)」「どんなに気に入っても高ければ買わない(5%水準)」の2項目で有意差が認められた。

表3. 流行性尺度の高群と低群の比較

被服行動尺度 <N>	平均得点 (標準偏差)		検定 ¹⁾
	高群 <56>	低群 <65>	
流行性尺度 (5項目)	27.4(2.22)	12.3(3.00)	***
・最新ファッションを知るために多くの店をまわる	5.8(0.91)	2.6(1.26)	***
・最新ファッションを着るよういつも心がける	5.4(0.75)	2.3(0.96)	***
・今はやっているファッションについてよく知っている	5.2(0.66)	2.4(0.99)	***
・ファッション雑誌をよく読む	6.4(0.78)	2.7(1.38)	***
・人と区別する個性的な流行の服を着る	4.6(1.14)	2.3(1.01)	***
機能性尺度 (5項目)	19.8(5.01)	20.3(5.01)	n. s.
適切性尺度 (5項目)	26.2(3.33)	24.6(5.33)	n. s.
・仕事の内容にふさわしい服装をする	5.8(0.79)	5.3(1.33)	*
経済性尺度 (5項目)	16.9(4.67)	19.0(3.90)	**
・百貨店やブティックよりスーパーで服を買う	1.9(1.42)	2.6(1.76)	*
・高価な服は必要ない	3.8(1.35)	4.7(1.33)	***
・どんなに気に入っても高ければ買わない	3.4(1.68)	4.2(1.69)	*

¹⁾ t検定 *P<0.05、**P<0.01、***P<0.001

表4. 機能性尺度の高群と低群の比較

被服行動尺度 <N>	平均得点 (標準偏差)		検定 ¹⁾
	高群 <71>	低群 <69>	
流行性尺度 (5項目)	20.0(6.30)	19.4(6.52)	n. s.
機能性尺度 (5項目)	25.4(2.34)	15.0(2.76)	***
・デザインより着用時の動きやすさを重視	4.8(1.08)	2.8(0.98)	***
・保湿性や通気性の良い服を選ぶ	5.1(0.92)	2.5(1.01)	***
・華美より機能性を重視する	4.6(1.56)	2.9(0.78)	***
・吸湿性の良い生地の服を選ぶ	4.9(0.97)	2.6(0.88)	***
・丈夫で長持ちする服がよい	5.9(0.91)	4.3(1.37)	***
適切性尺度 (5項目)	27.1(3.66)	23.3(4.55)	***
・不謹慎だと思われる服装はしない	5.6(1.32)	4.7(1.58)	**
・その場に合った服装は必要	6.4(0.75)	5.8(1.18)	**
・人が場違いな服装をしているのを見るのは耐え難い	5.0(1.45)	4.4(1.60)	*
・仕事の内容にふさわしい服装をする	5.9(0.97)	5.1(1.20)	***
・着用する服が社会的にふさわしいものか考える	4.3(1.31)	3.2(1.35)	***
経済性尺度 (5項目)	19.5(4.29)	17.4(4.07)	**
・高価な服は必要ない	4.7(1.56)	3.9(1.41)	**
・どんなに気に入っても高ければ買わない	4.4(1.69)	3.8(1.66)	*

¹⁾ t検定 *P<0.05、**P<0.01、***P<0.001

適切性尺度では衣服の適切さを重視すると、機能性や快適性を重視する傾向が高くなるが、流行への関心や経済性の重視には差がない。ただ、「百貨店やブティックよりスーパーで服を買う (1%水準)」では適切性の高い群が高得点となった。機能性では有意差 (0.1%水準) が認められ、「衣服のデザインより動きやすさを重視 (5%水準)」と他の4項目は0.1%水準で適切性の関心が高いほど機能性の重視が高くなった。

経済性尺度の高群は低群より「衣服のデザインより動きやすさを重視 (5%水準)」、「保湿性や通気性の良い服を選ぶ (5%水準)」、「華美より機能性を重視 (0.1%水準)」の機能性尺度項目が有意に高い得点を示し、「はやっているファッションを知っている (1%水準)」、「ファッション雑誌をよく読む (0.1%水準)」の流行性尺度項目で有意に低い値を示した。また、経済性尺度の項目中で「多少値段が高くても品質のよい衣服を選ぶ」のみ高群と低群での有意な差は認められなかった。機能性よりも経済性が購入決定の大きな影響となっていることも考えられる。

これらより学生の被服行動の特徴は、衣服における流行について関心が高いほど、雑誌や店舗を見て回り情報を得ることの努力を惜しまず、新しい流行を取り入れることに積極的であり、衣服購入時に購

女子短大生の被服行動と衣服管理

入店舗や流行にあった衣服であることが優先され、経済性の重視度は下がる。一方、衣服の品質や機能性、快適性の重視傾向と衣服の身だしなみの適切さについての関心には高い関連がみられた。また、機能性を重視するものは購入時の経済性も重視する傾向がみられた。衣服の機能性を重視することは衣服に対する意識は高く、知識への関心も高いものと考えられる。中川⁴は社会性を気にする女子大生はしきたりを重んじ流行に消極的であるとしているが、今回の調査では身だしなみの適切性と流行への関心との関連は特にみられなかった。衣服の品質や機能・着用時の快適さに関する意識の高低が、衣服の選択・購入や着装に関連する行動のひとつの要因となっており、被服素材や機能性などの適切な知識・技術を学習により獲得することで被服行動の機能性次元のみでなく、社会性や経済性の傾向にも影響を与えるものと考えられる。

表 5. 適切性尺度と高群と低群の比較

被服行動尺度 <N>	平均得点 (標準偏差)		検定 ¹⁾
	高群 <69>	低群 <60>	
流行性尺度 (5項目)	20.5 (6.22)	18.7 (5.43)	n. s.
機能性尺度 (5項目)	22.2 (4.37)	17.6 (4.57)	***
・デザインより着用時の動きやすさ重視	3.9 (1.27)	3.5 (1.24)	*
・保温性や通気性の良い服を選ぶ	4.2 (1.38)	3.0 (1.31)	***
・華美より機能性を重視する	4.2 (1.12)	3.4 (1.14)	***
・吸湿性の良い生地の服を選ぶ	4.1 (1.33)	3.3 (1.22)	***
・丈夫で長持ちする服がよい	5.8 (1.13)	4.4 (1.32)	***
適切性尺度 (5項目)	30.0 (1.91)	20.0 (2.76)	***
・不謹慎だと思われる服装はしない	6.5 (0.74)	3.9 (1.35)	***
・その場に合った服装は必要	6.7 (0.54)	5.4 (1.26)	***
・人が場違いな服装をしているのを見るのは耐え難い	5.8 (1.12)	3.4 (1.42)	***
・仕事の内容にふさわしい服装をする	6.2 (0.80)	4.6 (1.11)	***
・着用する服が社会的にふさわしいものか考える	4.9 (1.15)	2.9 (1.11)	***
経済性尺度 (5項目)	18.3 (4.87)	17.6 (4.06)	n. s.
・百貨店やブティックよりスーパーで服を買う	2.29(1.44)	1.55(0.76)	**

¹⁾ t検定 *P<0.05、**P<0.01、***P<0.001

表 6. 経済性尺度と高群と低群の比較

被服行動尺度 <N>	平均得点 (標準偏差)		検定 ¹⁾
	高群 <65>	低群 <72>	
流行性尺度 (5項目)	18.5(6.62)	21.3(5.11)	**
・今はやっているファッションについてよく知っている	3.5(1.49)	4.1(1.24)	**
・ファッション雑誌をよく読む	4.2(1.95)	5.4(1.46)	***
機能性尺度 (5項目)	21.6(4.94)	19.1(4.36)	**
・デザインより着用時の動きやすさ重視	4.0(1.35)	3.5(1.32)	*
・保温性や通気性の良い服を選ぶ	4.0(1.63)	3.4(1.24)	*
・華美より機能性を重視する	4.2(0.98)	3.5(1.03)	***
適切性尺度 (5項目)	26.0(4.71)	25.4(4.58)	n. s.
経済性尺度 (5項目)	23.1(1.84)	12.9(2.35)	***
・安ければ気に入らなくても買う	4.5(1.44)	2.0(1.22)	***
・百貨店やブティックよりスーパーで服を買う	3.7(1.79)	1.3(0.62)	***
・多少値段が高くても品質のよい衣服を選ぶ	4.2(1.48)	3.9(1.62)	n. s.
・高価な服は必要ない	5.4(1.10)	3.3(1.24)	***
・どんなに気に入っても高ければ買わない	5.3(1.31)	2.5(1.27)	***

¹⁾ t検定 *P<0.05、**P<0.01、***P<0.001

2. 1年生の衣服管理の調査の結果

1年生の衣服管理に対する実態を知るために学習経験、管理実践、購入管理考慮、表示理解の4項目について調査を行った結果を図1に示した(n=135)。学習経験は80%が有るとしているが、洗濯等の

衣服管理を自分で行う者や衣服を購入するときに着用後の手入れなどの管理を考慮する者は半数であった。取り扱い絵表示への理解はあるとする者はそれに比べて85%と多かった。これまでの学校教育での衣服管理学習が現在の実践に結びついていないが、取り扱い絵表示に対する認知度は高いとした筆者の報告¹と同傾向であった。

また、衣服購入時の考慮項目順位の結果を図2に示した。経済性を1位とする者が37.8%で最も高く、ついで流行と機能性が27.4%であった。この3項目で60%が1・2位を占めた。適切性は3位にあげたものも多量多く45.9%であった。管理は5位にあげるものが65.2%で、購入時での考慮項目としての優先順位が低く、重視されていない現状がここでもみられた。

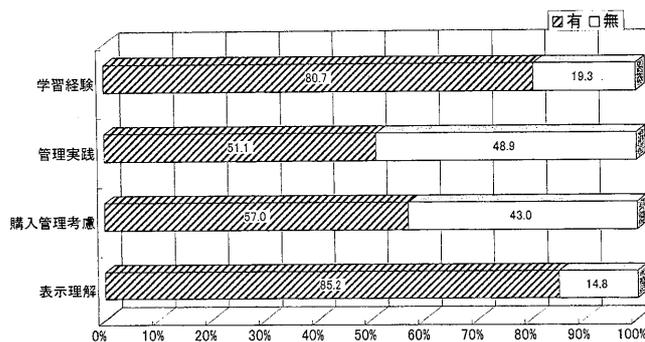


図1. 衣服管理調査の結果

n=135

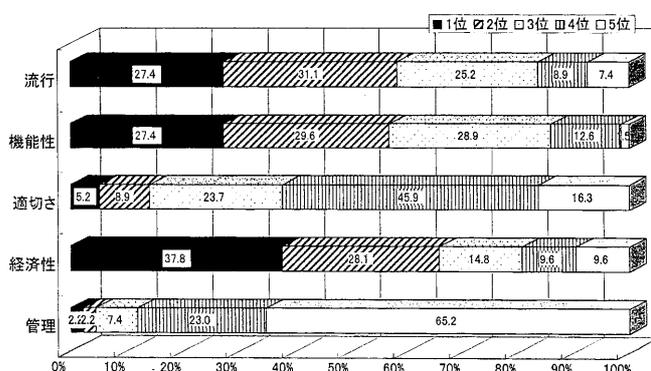


図2. 衣服購入時考慮項目の順位

n=135

3. 衣服の管理に関する現状との関連

2.での1年生の衣服管理の状況と被服行動の関連をみた結果を表7～10に示した。衣服管理の学習経験では、4尺度では経済性尺度にのみ有意差(5%危険率)があり、「安ければ気に入らなくても買う(5%危険率)」「どんなに気に入っていても高ければ買わない(1%危険率)」の2項目と機能性の「保湿性や通気性の良い服を選ぶ(5%危険率)」で学習有りが高くなっている。中・高等学校での被服学習が日常の被服行動にあまり生かされていないといえる。

衣服の管理実践については、実践者は「デザインより着用時の動きやすさを(5%危険率)」重視しているが、4尺度では有意な差はなかった。衣服の手入れを自己実践していることによる被服行動には関連がなく、衣服の選択・着用と衣服の管理が乖離していることがうかがえる。

衣服の購入管理考慮では、機能性尺度で有意な差(0.1%水準)が認められた。購入時に管理を考慮するものは「衣服のデザインより動きやすさ」を重視(1%水準)し、「保湿性や通気性の良い服」を選び(1%水準)、「華美より機能性を」重視(5%水準)する、「吸湿性のよい生地を」選んで(0.1%水準)いる。

取り扱い絵表示の理解との関連では、機能性尺度(0.1%水準)と適切性尺度(1%水準)で理解しているものに高い傾向が認められた。理解がある者は「衣服のデザインより動きやすさ」を重視(5%水準)し、「保湿性や通気性の良い服」を選び(1%水準)、「華美より機能性を」重視(5%水準)する、「吸湿性のよい生地を」選んで(0.1%水準)いる。また、「仕事の内容にふさわしい服装を」(5%水準)

女子短大生の被服行動と衣服管理

し、「着用する服が社会的にふさわしいものか」考えている（1%水準）。

衣服の品質や機能性を重視する傾向は、具体的な絵表示の理解度や購入するときに着用後の手入れを

表7. 被服行動尺度と衣服管理の学習との関連

被服行動尺度 <N>	平均得点（標準偏差）		検定 ¹⁾
	学習有 <109>	学習無 <26>	
流行性尺度（5項目）	20.2(5.18)	18.8(5.21)	n. s.
機能性尺度（5項目）	20.4(4.14)	18.9(3.77)	n. s.
・保温性や通気性の良い服を選ぶ	3.8(1.28)	3.2(1.14)	*
適切性尺度（5項目）	25.4(4.07)	24.0(3.91)	n. s.
経済性尺度（5項目）	17.9(4.22)	16.0(3.92)	*
・安ければ気に入らなくても買う	3.3(1.62)	2.6(1.47)	*
・どんなに気に入っても高ければ買わない	4.1(1.58)	3.2(1.42)	**

¹⁾ t検定 *P<0.05、**P<0.01、***P<0.001

表8. 被服行動尺度と衣服管理の実践との関連

被服行動尺度 <N>	平均得点（標準偏差）		検定 ¹⁾
	実践有 <69>	実践無 <66>	
流行性尺度（5項目）	20.2(4.81)	19.7(5.59)	n. s.
機能性尺度（5項目）	20.7(3.26)	19.4(4.76)	n. s.
・デザインより着用時の動きやすさ重視	4.0(1.19)	3.5(1.33)	*
適切性尺度（5項目）	25.17(4.09)	25.08(4.08)	n. s.
経済性尺度（5項目）	17.59(3.92)	17.38(4.53)	n. s.

¹⁾ t検定 *P<0.05、**P<0.01、***P<0.001

表9. 被服行動尺度と購入時の管理考慮との関連

被服行動尺度 <N>	平均得点（標準偏差）		検定 ¹⁾
	考慮有 <77>	考慮無 <58>	
流行性尺度（5項目）	19.9(4.97)	20.3(6.47)	n. s.
機能性尺度（5項目）	20.6(3.79)	17.2(4.66)	***
・デザインより着用時の動きやすさ重視	4.0(1.20)	3.5(1.34)	**
・保温性や通気性の良い服を選ぶ	3.9(1.28)	3.3(1.18)	**
・華美より機能性を重視する	3.9(1.37)	3.5(0.92)	*
・吸湿性の良い生地の服を選ぶ	4.2(1.16)	3.4(1.02)	***
適切性尺度（5項目）	25.2(3.91)	24.4(4.97)	n. s.
経済性尺度（5項目）	17.7(4.03)	16.2(5.05)	n. s.
・百貨店やブティックよりスーパーで服を買う	2.29(1.44)	1.55(0.76)	**

¹⁾ t検定 *P<0.05、**P<0.01、***P<0.001

表10. 被服行動尺度と取り扱い絵表示の理解との関連

被服行動尺度 <N>	平均得点（標準偏差）		検定 ¹⁾
	理解有 <115>	理解無 <20>	
流行性尺度（5項目）	20.3(4.67)	19.5(5.83)	n. s.
機能性尺度（5項目）	21.2(4.00)	18.6(3.77)	***
・デザインより着用時の動きやすさ重視	3.8(1.24)	3.1(1.32)	*
・保温性や通気性の良い服を選ぶ	3.8(1.20)	3.0(1.40)	**
・華美より機能性を重視する	3.8(0.93)	3.4(0.88)	*
・吸湿性の良い生地の服を選ぶ	4.0(1.13)	3.0(1.05)	***
適切性尺度（5項目）	26.0(3.46)	23.9(4.53)	**
・仕事の内容にふさわしい服装をする	5.5(0.98)	5.0(1.20)	*
・着用する服が社会的にふさわしいものか考える	4.3(1.27)	3.6(1.33)	**
経済性尺度（5項目）	18.0(4.35)	16.9(3.98)	n. s.

¹⁾ t検定 *P<0.05、**P<0.01、***P<0.001

考えに入れていると高くなることから、衣服管理の学習により、衣生活への関心をもつことで被服行動を高めることができると考えられる。

被服行動を規定する要因は文化、社会、個人の3つの水準に分類されている⁵。文化の水準には、被服を構成する材料、冷暖房設備や自動車などの一般技術、規範などが、社会の水準には、社会的役割、ファッションの変化などの流行などが、そして、個人の水準には、パーソナリティ、態度、価値観、感覚、知覚などが含まれる。これらの要因は、相互に関連し合うので、被服行動はさまざまな要因により複雑に規定される。具体的な実習・経験学習だけでなく、衣服の着装、購入、選択などに関する社会との関わりや被服の嗜好や価値意識、感情などの社会・心理的機能を学習内容に結び付け、学生の被服行動にそくした学習内容や教材の検討が必要と考える。

まとめ

介護福祉士養成教育における衣服管理を中心とした衣生活の授業内容を検討する基礎知見を得るために、女子短大生の被服行動の傾向を調査した。衣服における流行についての関心が高いと衣服選択の際の決定要因としての経済性の重要度が低くなる。また、衣服の機能性や快適性の重視傾向と衣服の社会的な適切さへの関心が相互に高い関連を示した。

衣服の構成素材や機能、管理の知識や技術を獲得し、これらに対する意識や関心をもつことにより、被服行動の規定要因としての衣服の機能性次元が高まり、経済性次元や適切性次元をも向上しうることが示唆された。人が被服を着用する目的は、1つは「生理的目的」で皮膚の保護、体温調節、運動促進などの身体内部の生理的平衡状態を保ち、生命維持と健康増進を志向した目的であり、他は「社会・心理的目的」で自己表示・流行・礼儀・規則など自己顕示や社会的適応を志向した目的で、これは主に経験と学習によって培われるとされる⁶。日頃何気なく行っている着装、選択、購入などの衣服に関する行動はさまざまな社会的・心理的な要因の影響を受けており、年齢の異なる高齢者の衣生活を理解するためにもこれらの要因を学習内容に取り入れる検討が必要となる。実践例として、学生にお気に入りの服を持参させ、その嗜好理由や購入時の選択動機、着装時の感情、TPOによる適切さ、取り扱い絵表示を参考にしての手入れ法の確認などを、自分の1枚の衣服を通して学習させることにより、衣生活の社会的・心理的な要因に気づかせたい。また、高齢者の生活意識と被服行動を深く理解するためにも「心理学関連科目」と連携した授業展開の取り組みをも視野に入れて検討していきたい。

引用・参考文献

- 1 鷲見裕子：大学生の衣服管理に対する意識と実態、高田短期大学紀要、25、137-150、(2007)
- 2 永野光朗：被服行動尺度の作成、繊維製品消費科学、35、468-473、(1994)
- 3 小林茂雄：装いの心理、アイ・ケーコーポレーション (2003)
- 4 中川早苗：衣生活システムの理論的・実証的研究(第3報) 女子大生の生活場面と着装基準に関する研究 家政学雑誌 37 397-403 (1986)
- 5 中川早苗編：被服心理学、日本繊維機械学会、(2004)
- 6 神山 進編：被服行動の社会心理学、北大路書房、(1999)